

# 古の花を 伝えた鎌足紙 時を超えて復活

虫食いのないまま200年を経た佐竹北家の「花葉集」。鎌足紙を使っているから虫の被害がなかったともいえます。その真髄を探るため歴史を辿ってみました。

脈々と続いた鎌足紙ストーリーは現代に続き、先人の残した足跡を基に、紙造りを再現・復活した地域の輝きがありました。

## 秋田で花開いた「江戸の植物図録」

目にする機会が限られているためか、花葉集のことは広く知られていませんが、江戸時代後期、角館佐竹北家7代当主佐竹義文が植物を押し花にまとめたものです。約200年前のものとは思えないほど良い状態で保存され、し



秋田で花開いた「江戸の植物図録」

200年の時を  
経ても  
鮮やかに

## 花葉集

文政3年(1820)、佐竹北家当主の佐竹義文が、久保田藩江戸上屋敷にいた幼少の藩主義厚(当時12歳)の元服に立ち会うため江戸へ出発。江戸滞在中と帰郷の道中に採集した、260余種類の植物を押し葉にした標本。上・下巻に収めている。昭和30年に秋田県有形文化財に指定。角館樺細工伝承館で保管されている。



かも中の本紙は虫一つ付かずのままです。押し葉とその横に採集した月日や場所が書き込まれ、しっかりと読みとれます。

久保田藩主義厚の元服に立ち会っていた義文は、江戸に一年半余り滞在しました。当時、本草学・植物学が流行っていた時代背景にあつて、義文も江戸名所の植物を採集し、押し花にしたのです。それを綴ったのが「花葉集」です。上・下巻に分けられ、上巻は江戸滞在中のもので構成されています。その自序に義文筆で、

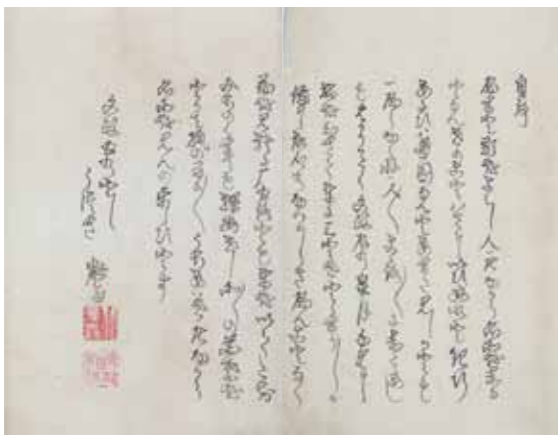
「花を見捨てる雁もろとも東をいて  
たち みちのくまでも深幽せし  
所々の花葉をとりて 紙の間に  
くうちあはせ居ながら名所  
を見んの楽しひとす」  
とあります。

義文は、江戸の植物採集が主たる目的ではなく、景勝地の散策を楽しみながら、その思い出に採集を続けたのだという見方ができます。義文が綴った花葉集は、本草学において流行の先端を歩み、江戸の植物目録では最初のものだろうといわれています。  
もう一方の下巻は、江戸から故郷の角館に戻るまでの道中に採集した植物でまとめられています。地名の記録も含め、紀行文として収めたかったのではと推察できます。



## 佐竹義文(1770~1825)

角館佐竹北家7代当主。6代佐竹義躬の子。義躬譲りで絵をよくし、南画・南蘋画・俳画など多くの作風を駆使した絵を描いている。号に豁齋・北漫翁・北塘老など、俳号には璞亭・二世坤麓などがある。角館の伝統工芸品である樺細工や白岩焼などの振興も図り、産業面での貢献も大きい。



▲自序(見開きに編集)



秋田で花開いた「江戸の植物図録」

久保田藩主義厚の元服

秋田

秋田

秋田



▲右:採集/9月8日 あさちかはらの月草  
※浅茅原・現在の台東区にある妙亀山総泉寺の周辺で、  
当時は墨田渡頭の名所だった場所  
鏡が池弁天の山吹  
▲左:採集/9月8日 浅草観音寺境内弁天下高篠の楓

▼右:採集/4月23日 墨田の土手(墨田堤)の屋がほ  
秋葉社内(秋葉権現)の卵の花  
みめくりのきりしま  
※みめくりは三囲(みめぐり)神社のことで、  
現在の墨田区向島にある。  
きりしまはキリシマツツジのこと。  
▼左:採集/4月23日 枕橋の竹  
5月朔日 いり屋むらの杉



▲右:採集/8月7日 多田の薬師 百日紅(別名サルスベリ)  
萩  
▲左:採集/8月7日 遠州秋葉の椎の木  
※遠州秋葉は茶道の一流派開祖である小堀遠州に関係か。  
8月14日 小梅村水戸家御下屋敷川岸の芦のほ



▲右上:採集/7月2日 浅草御蔵前石垣の野さく  
▲右下:採集/7月22日 大のし庭の松梅の葉  
▲左:採集/7月28日 牛の御前の土手の柳  
むかふしま長島屋庭樹 藤なき  
むかふしま屋内(植物名の記入なし)

紙の抄造にはネリという植物粘液が使われますが、小山田ではノリウツギを使用。角館のものは米糊を使用したと西宮家に伝わっています。でんぷん質のネリを使用した場合には虫による被害が多くなりますが、「花葉集」の本紙には虫喰いの被害が見当たらないため、使用したネリはでんぷん質ではなかったと見られています。でんぷん質のネリをつかった表紙は虫喰いが激しく、表紙と本紙の材質には一目瞭然の違いが見られます。さらに本紙には何らかの防虫剤が入られたのではと推定されますが、小山田にはニガキとトウガラシの煎じ汁を紙料に混入し、防虫したとの口伝が残ります。

紙質としては、角館紙は越前紙の系統で、墨付きはいいものの、原料に藁を混合しているために紙質が柔らかく、一方の鎌足紙は楮特有の強靭さがあつたと伝わっています。

### 花葉集の紙とネリ

佐藤氏の調査・研究によると、鎌足紙の始祖となる西宮三左エ門が寛延年間(1748~51)に奥日光から小山田村に移住。後に7~8年かけて那須地方で秘伝の紙漉技術を習得、帰村して紙漉きを始め、他に村の5家にも技術を伝授。義文の時代のこの村は和紙の抄造が盛んだつたと推察できます。



▲楮(コウソ)  
1年生枝の品質がよく、2年以上経過した枝の繊維質が硬化してしまい、品質が1年生枝より劣ってしまう。  
古くから佐竹北家は村々に桑と楮の栽培を奨励していたようで、楮については紙漉きの振興を期待していたようだ。八津や鎌足にも植栽されていたことから、鎌足紙の原・材料集めは容易だった。

# 佐竹北家の文化と共に

佐竹義文とその時代の角館

↑「圓殊殿」佐竹義文筆

←左「花鳥図」右「山水図」佐竹義文筆

白岩焼「角皿」→伝松本運七作 秋田県指定有形文化財

榊細工「銀皮印籠」

白岩焼「武者絵つぼ」



▲切り口を斜めに、鎌で楮を刈り取り、束ねて1mくらいに切断  
 ▲釜に楮を入れ、蓋を覆わせて楮を蒸す  
 ▲蒸し上がった楮の皮を剥ぎ取り、小束にして軒下で乾燥  
 ▲乾燥した黒皮を一晚水に浸け、黒皮を削り取る。今も手作業  
 ▲黒皮を取ると白さを増すため、白皮を雪面にさらし凍らせる  
 ▲煮熟(しゃじゅく)ソーダ灰を入れて白皮を煮る  
 ▲水にさらして不純物を取除き、一晚流水にさらしてアクを抜く  
 ▲叩解(こうかい)機械で叩き、繊維をバラバラにする  
 ▲昔は角棒で叩いていた  
 ▲なぎなたピーターで攪拌し、繊維を分散する  
 ▲昔は馬楯(まげ・別名マンガ)を使って繊維を分散していた(現在も攪拌に使用)  
 ▲漉き舟に材料を入れ、ねりを加えて攪拌、木桁、貫で漉き取る  
 ▲簀(す)から離し、順次重ね合わせていく  
 ▲圧搾して徐々に水を絞る  
 ▲乾燥器に貼り付けて乾燥する。昔は板に貼って天日乾燥

鎌足紙復活へ  
 人々と地域の  
 物語りは続く



▲学習会では地元の皆さんも興味津々。新潟や埼玉へ研修を重ね、道具も手作りだった。  
 ▲平成12年3月、鎌足集落に和紙工房を建設、完成した。緊張の紙漉きだったに違いない。右は、鎌足和紙の会の佐々木茂徳会長。(写真は当時の頃)

花葉集に鎌足紙が使われた確証は見つかりませんでした。その関係の深さを知ることができました。口伝ながら「鎌足紙が御用紙だった」という、旧家で紙漉きの家でもあった先人の言葉には、鎌足紙への自信と誇りが感じ取れました。

佐竹義文は、高品質の鎌足紙に大きな期待を寄せていたかもしれません。文化を創造し、技を磨き、それが未来につながる。その役割を鎌足紙に託し「花葉集」が出来上がったのではないのでしょうか。

地域への誇り、繁栄への気概は、調査をまとめた佐藤政一氏、復活に取り組んだ地域の皆さんへと脈々と続いていることを感じました。

古から未来へ、江戸、角館から鎌足へ。鎌足和紙が育んだつながりは市民の誇りとなって輝いています。

先人の気概を今へ

現在は、「鎌足和紙工房」として、秋田内陸線八津駅近くにある、仙北市活性化施設「かたくり館」に併設され、活動を引き継いでいます。館長でインストラクターの八柳茂さんの指導のもと、予約で和紙漉き体験ができます。卒業証書を紙漉きする学校もあり、話題となっております。

鎌足紙、復活へ

地域の誇りだった鎌足紙にスポットを当て、紙漉きを復活させようと、平成11年(1999)、地元の有志でつくる鎌足和紙の会(佐々木茂徳会長・写真上)が立ち上がりました。しかし、道具はもちろん知識もない状態で、全くゼロからのスタートだったのです。茂徳さんの願いは「形ばかりの復活ではなく、当時の技法や紙質の再現が本来の復活」でした。楮の栽培や紙漉きなど、和紙づくりの研さんを重ね、鎌足紙の再生・再現を目指して活動が始まりました。

活動では、和紙復活勉強会として実践者や専門家を招き、紙漉きやその道具、歴史などの基本を学びました。さらに新潟県上川村の小出和紙工房などを訪ね、紙漉きの技などや紙づくりを体得してきました。

復活に向けて第一歩となる工房ができたのは翌年の2月で、最初の紙漉きが行われました。鎌足和紙として再出発したのでした。

学習会に招かれ、この地を訪れた新潟県の小出和紙の伊藤一雄さんは「鎌足の水と陽の光は、和紙漉きにとって最高の条件。昔この地で漉かれた紙の品質の高さが予想できる」と述懐されたそうです。



仙北市活性化施設「かたくり館」鎌足和紙体験工房  
 平成18年4月にオープン。談話室や農産物加工所、調理実習室を備え、講習会やイベントの他、併設の和紙工房では「鎌足和紙」の制作体験(要予約)ができる。電話0187(47)3535・FAX共



生活の中でも使われていた鎌足紙  
 135年前の記録  
 取材中、明治13年のものを含め、鎌足紙に書き込まれた神社の記録を見せていただいた。が虫喰いによる被害は少なく、質の高さに気づく。

参考文献 角館誌 別巻 植物(花葉集)  
 西木村文化財シリーズ第四集 鎌足紙  
 鎌足和紙の復元  
 取材協力 角館樺細工伝承館  
 仙北市活性化施設「かたくり館」  
 監修 中田達男 角館樺細工伝承館長

